

教育実習 I を終えて

寺下 摩耶

教育実習 I を終えて実際に子どもたちと触れ合ったり遊んだり、保育者の方の現場での話や対応を見たりし講義だけでは学べないことをたくさん知ることができたと思う。また、課題をたくさん見つけることができた実習となった。

教育実習で一番心に残っていることは子どもに響くような言葉がけについてだ。実習が始まったばかりの時は当たり前だがひとりひとりの子どもについてどのようなことに関心を持っているのかなど分からず、「〇〇しようね。」「かっこよくできるかな。」などといったどの子にもできる声かけしかすることができなかった。しかし日がたっていくにつれて、少しずつその子どもが興味のあるもの、性格などがこうなのかもしれないと分かってきて、具体的にカマキリに強く興味を持っている子どもには「カマキリより早くできるかな。」と次の行動に移れるように声をかけることができた。またそのときの様子に合わせてその子どもよりも年齢が上の子どもがいたら「お兄さん、お姉さんみたいにできるかな」と声をかけることもできた。その声かけを行った時に、子どもが反応を示し行動をすることができたときはとても嬉しかった。しかし昨日はこの声かけをしたら帰りの支度が早くできたからと、昨日と同じ声かけをすると子どもは帰りの支度をなかなかすることができなかった。その日の子どもの様子や気分によっても子どもに響く声かけというものは異なるということが分かった。しなければいけないことなどに興味を持ってもらうには、様々な声かけ、促し方を考えなければならず、ワンパターンでは良くないということを知ることができた。

実習 2 週目に入ると子どもたちの性格が見えてきて、「この子はこんな性格なのだ。」と思いついてしまっていて主任の先生から注意をうけた。ある程度の性格が分かったとしても、そこでこんな性格と決め付けてはその子どもを知ることに関界ができてしまう、半年くらい過ごしてきても初めて知る一面もあって何年も保育者としてやってもその子どもの性格について全部を知るのは難しいといった内容の注意をうけた。その子を知ったつもりになって子どもと関わることは、子どもののびる可能性を奪ってしまうことにもなるだろうし、保育者としての楽しみもなくなってしまうのではないかと思った。子どもといっても人なのだからこんな人だと決め付けては差別となってしまうだろうと思った。新しい子どもの一面を発見できたときはとても嬉しいだろうと思う。だからこそ決め付けて小さな変化など見落としてしまうようになってしまったら新しい一面をすることができないと思う。子どもの性格を分かりきったつもりになってはよくないなと知ることができた。

日誌や時案など辛い、大変と思うこともあったり、睡眠時間をなかなかとることができなかつたりもしたが子どもたちと関わりとそんなことも忘れてしまうくらい楽しかった。学んだことや反省を次の実習や学校での講義などに生かし、保育者として現場に立ったときに力となるようにしたい。